
キスの味

弥月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

キスの味

【NNコード】

N6779T

【作者名】

弥月

【あらすじ】

遅めの昼食を食べていたら、突然ジェチが僕に好きな人いるのかつてきいてきて……。

中華／一番でジェチ マオ フェイです。

マオが女体化します。気をつけてください。

昼のピークが過ぎて一息ついた頃。

厨房の片隅でジユチとマオは遅めのお昼を食べていた。他愛ない話の中で盛り上がっていたのまではよかつたが、

「マオはん好きな人って居てるの？」

不意に出された話題のせいで喉かな休憩が一変して思わず、飲んでいたお茶を吹き出しそうになつた。

「ゴッホゴホ……じつジユチ何言つてーー！」

「やだなマオはん。好いてる人くらいあるやう?」

ニヤニヤした笑みで肘でつづいてくるジユチが、なんとなく怪しくて反射的に身構えしまう。

「別に僕は特別な好きな人はまだいないよーー！」

「まだつてまたまた」

ジユチのニヤニヤとした笑みは消えず。

寧ろ獲物を見つけたかのように視線が刺さつて痛い。

(こるけど言えないもん。フェイさんだなんて……)

バレたくない。バレたら大変なことになる。

自分が女だと言つことも話さなきゃいけないだ。

(そんなの無理！！)

「マオは冷や汗を吐きながら必死に冷静を装つたが、自分でも情けない声で、「本当だつて！！」否定をしたもの……。

「マオはん。嘘はいけまへんわ。ほら可愛いお顔が真っ赤」

ジユチが言つなりグイッと距離を縮めて、ほりとばかりにマオの頬をジユチの手がむにっと挟んだ。

頬にひんやりと冷たさを感じるがそれどけではない。

「それはジユチが変な事言つからーーー。」

「別に変なこと言つてへんよ。マオはんにこるかいなーが氣になつただけですやん」

皿をぱぱくつわせたりカワチと皿つジユチにほとせと困つ、

「それはやうかもしれないけど…………」

「マオはんつて意外に奥手なん？」

「はー？」

びりしたうそうとえられるんだと心底驚きと苛立ちが芽生え。ついでにジユチの手を払いのけて、

「僕が奥手だらうとなかろうが、好きな人が居ようとも居なかうがジユチには関係ないだろ」

「それはビックリ大有りや

わざわまでの笑顔が消えて真剣な顔付きでマオを見る。

「それほどどうこう」とへ。

僕も応えて真剣に向き合つた。がジユチは急に口元がにかつと上がりつて

「ああ～どうこう」としゃらな

「ジユチ！…」

急に真剣に言つたり、また茶化されたりで、まるでジユチに持て遊ばれているかのような態度にいい加減腹がたつてきた。

「もうこことよ。」の話はやめよ

「マオはんは気にならんの？」

「……気にならないって言つたら嘘になるナゾ。このままじゃ埒が空かないじゃないか」

マオがぼそつと囁つてジユチはマオの片手を引っ張り抱き締めた。そして素早くマオの顔を無理やり上へ向かせる。

ジユチの顔が鼻に付きそつなくらいになるまで間近に迫つてヤリと笑う。

「こなことされてもまだわからへんの？」

「……わつわかる訳がないだろ……こい加減離れろよ……」

「いけずやな。マオはん考えてみいひんの？」

「考えるたつて……」

マオは今更考えつてみてもわつぱり分からなすめてへの字に眉を潜めた。

するとジユチは面白がつているのかクスッと笑い。マオは耐えていた堪忍袋がこの笑顔でブチッとキレた。

マオはキリッと睨んで言い返せつとしたときジユチがマオの唇を親指でなぞり、

「例えばやナビな」ことわれたりじない思ひへ…」

「どなじつて……」

マオが動搖して声が震えた。

ジユチはお構い無しにマオの耳にリップ音を落とす。

「なつ向やつてるんだジユチ……」

「えつキス。まあ耳にやけどな」

「それはわかつて……うんつん……」

やつぱり訳が分からないと怒鳴りついたときに今度は唇にされた。

「じつジユチ……」

「マオはまるみるうちに頬も耳も真っ赤に染め上がり、まさに茹でダムみたいだ。」

ジユチは満足したのかにやっと上げる口元が憎たらしく。

「なんでキスする必要が有るんだよ……僕をからかってるだろ……」

「……」

「ジユチ……」

怒鳴り声を上げてみればジユチは満面の笑みで、

「我慢できへんよ。そないな顔をされたら」

「我慢つてなんだよ……僕は男だぞ……」

ムスッとした顔で睨み付けてやれば少しは距離を置いてくれると思つたのに全然引いてくれないし、まだ顔が近くにあって落ち着かない。

「それはどうでもいいやろ」

「良くない……そいつこののは大事な……すつ好きな人にやるべきだろ……」

「……おまえや」

ぶつきらりぱつに答えるジユチ。だがその言葉の意味を理解できずマオはただただ田を見開いて驚き固まつた。
それでもジユチはマオを見つめて言葉を待つた。
それでもマオが出せた言葉はとても小さな声。

「嘘だ」

「嘘じやない」

「だつて、そんなことあるわけない」

否定したかった。

だつてジユチはメイリンのことが好きつて前に言つてたしそれに自分は。

自分には大事な人がすでにいる。

ジユチの気持ちには応えられない。

マオは重くのし掛かる気持ちに目を伏せた。がジユチの真剣な声が耳に通る。

「好きや」

「だつて僕は男で」

「それでも好きや」

「……」

ジユチの目が本気だ。わかる。

マオにもわかるくらい必死つてこと。

それはちゃんと伝えていらない相手にとつて大変失礼なことだと悟つた。

マオはきりつとジユチに向かい合つて、

「ジユチ。『』めん。本気の事話すよ」

「ほんまの事?」

「うん。僕にとつてもう大切な人……大好きな人要るんだ」

マオは目をそらさずジユチに伝えた。

だつて本当の事だから誤魔化して逃げるのは本当に失礼だからと。

「知つてた」

「へつ?」

「フヨイやろ。もうバレバレや」

たしかに美形やもんなあとジユチは苦笑しながらマオにいつたがそんなことマオは聞こえてなかつた。

だつてこんな発端が起つたのは明らかにジユチが仕掛けた『誰が好き?』などというふざけた質問からだ。

そう思つと収まつていた怒りがふつふつと燃え上がる。

「ジユチのバカ!…つうか離せよ!…」

「いやや。好いてる女の子の抱き心地は気持ちええやもん」

「…」

ジユチは言つなりぎゅつとマオを抱き締める。
それに対してマオは暴れているが。

「どひどひして知つてるんだよ!…」

「せり、好い人の子を見とつたら性別偽つてゐる」といひてわかるぢやうか?」

「「」

「それに邪魔もんが居ても諦めるわこじやありへんし」

「くつ~」

マオは間抜けな声を上げてしまった。がその瞬間またキスを落とされるとほ夢にも思わなかつた。

軽く鳴るリップ音と舐められた唇にマオはひきつ声を荒げ。

「ジユチーーちやんうんうつう…………」

その不意をついて今度は舌を口内まで侵入させてきた。歯並びにそつてなぞつたり舌を絡ませたりしてくる。

不愉快で仕方ない。

いぐり舌から逃げても絡めてくる。

それに聞き慣れないピチャッやクチュなどの音が厭らしく響いて嫌だった。

「…………」

とにかく逃げよひとしたが、逃げよひにも後頭部を押せられて身動きできない。

息が出来ず鼻から通るへんな声も聞こえる。

マオは訳が分からずでも田から滲むものが流れていた。

(苦しき。苦しきよ)

息も限界でこんなキスは知らないし、目の前にいる人が怖かつた。

やつと解放されるとマオは貪るように空気を吸っていた。
肺に酸素を入れ荒い呼吸を調えるように。何度も繰り返す。
大分落ち着くとマオはジユチに支えられていこうとした。

腰がまったく立たないのだ。

力が抜けてしまつて今ジユチの支えがないと立てないほど。
さらにもづいと警告音が頭の中でも鳴り響く。
マオは血の気が引いた。がジユチは見逃す筈はなく。

「やつぱりマオはんは色っぽいわ」

「なにについて……」

「潤んだ瞳も苦しそうな表情もめっちゃそそる。特に唇なんかえろ
いで」

意地悪そうな笑みと共に囁かれた。

ジユチはマオの滴つた口元拭いと、また顔を近づけてきた。
また来るのかとマオは肩を震わせた。

ジユチに反抗したいのに力入らず思つよつに動けない体が憎い。

(フハイさんたすけてえ)

心から強く願つた。

もうこれ以上ジユチに踏み入れほしくない。

フェイを裏切りたくない。

マオは溢れる涙で頬に一本の道を作る。

『ちょっと待つもんつか。ジユチーーーーー』

唇が触れる直前にじこから声が聞こえた。

ジユチは怪訝した表情に変わり声をした方を向く。

直ぐ様田を見張った感じで驚いていた。

マオも向くと涙で滲んでよく見えないが、綺麗な深い茶色の長い髪と黒い服装。

そして良く知る声。

マオは自然と笑顔になる。

嬉しくて嬉しくて声を出してみたが思ったように声が出ない。

からうじて出たのは「ふえいさん」といつか細い声の想いの人名前だけだった。

フェイはマオの異変に気付て更にきつくジユチを睨む。

そして氷つくような低い声で相手を噛むように言い放つ。

「……マオから手を離せ」

「はあー。しゃないなー彼氏出でたらかなへんもん」

ジユチは笑ってマオを引き離すと椅子に座らせた。

マオを名残惜しそうに見つめてから、フェイの前を通りすぎたように見せかけてフェイに詰めよう。

「フェイの田那。マオはんを見張つとらんとあきまへんで」

「余計なお世話だ」

「そつか。でもわいまだ諦めたわけぢやうからよひじゅうな

すつヒジュチはフェイから離れへラッと笑うと消えて行つた。

* * * * *

いけすかない相手を視界に『らなくなるまで睨んだ。
居なくなつたの確認してからマオの隣に立ちやわらかい笑みでマオ
の手を握る。

「マオ大丈夫か？」

「……うつうん」

マオはか細い声と顎きで必死にフェイの問いに答えた。

それがとても健氣で愛おしい。

フェイは田を細田て微笑んだ。マオもつられて笑う。

いつものような笑顔だ。

ただ目は赤くなつて痛々しく、彼女が如何に辛かつたかひしひしと
伝わる。

それが悲しかつた。握る手の力がこもる。

抱き締めたい気持ちを押さえてマオの頬を包むように手を添え、涙
の後を優しく拭う。

「マオ。すまん……俺が早く来ているいれば

フェイは顔を黙んで「」を恨めしい。

だがマオは首を横に振つてからフェイに首に抱きついた。

「……マオ」

まるで大丈夫だよとばかりにぎゅっと強く抱きつかれ、今顔は見えないがきつと安心しきつた顔でいるに違いないとフェイは感じ取つた。

だがいつまでもここにいるのは良くない。

ここはあくまでも厨房。

いつ誰が来ても可笑しくないのだ。

フェイは一様落ち着いたマオを別の場所に運んだ方がよいと判断しやせしく囁く。

「マオちょっと移動するわ」

言つなり直ぐ様行動を起こした。

驚いているマオにしきり掴まつてゐると言つた瞬間にマオの膝を抱えるように抱き上げた。

いわゆるお姫様抱っこだ。

「だつだいじょうぶだよ」

「まだダメだ。それにここは離れた方がいい」

「でも……」

「腰が抜けて立てないだろ」

「……たてるから

「ダメだ。呂律さえまだ治つてないのに」

フェイはまるで子供をしかるよつにマオにめりこまへ放つと軽々運ぶ。

マオはまだ拗ねているのかムスッとしていたが暫くすると首に手を回して体を預けてくれた。

見た目はわりとじっかりしているよつに見てたのだが実際に抱き上げるとマオは軽い。

服で力モフラーージュしているせいだろう（メイリンの力作でもある）がこれだけ軽いと不安になるもんだ。

小さなため息をつきつつフェイは自室に向かった。

借りていた宿舎にはマオを人に見せることなくたどり着くことができた。

ほつと胸を撫で下ろしてマオをイスに座らせる。

部屋はクローゼットとベッドが部屋の隅にあり、その近くにはテーブルとイス、お茶セツトなどが置いてあった。

落ち着かせるためにもいだろうとお茶を出そうと思いつくべにあつたお茶セツトを持ったとたん背中違和感を感じた。

振り向くとマオが上着の裾を掴んでいたがフェイと田が合つとすぐ離して、ぱっと離しておどおどしている。

フェイは微笑んで、

「どうした？」

「いやあ……あの……なんでもない」

「大丈夫。ちょっと部屋を出るがすぐ戻つてくるから」

一人にされるのが不安だったのだろう。

安心できるように答えたならマオはうんと頷いて微笑んでくれた。フェイは堪らなくなつてマオの頭を軽く撫でてから部屋出た。

多少お湯を沸かすのに手間取つたが割合早く帰つてこれた。ドアを開けるなり花のように笑うマオが迎えてくれた。

「お帰り」

「ああ。マオもう大丈夫なのか？」

「うん。大丈夫」

えへへっと笑うマオにフェイも思わず顔が綻ぶ。

暫く一人はゆっくりとお茶を飲んでいた。窓を見るともう日が沈みかけていてオレンジ色の綺麗な光が窓から差し込む。

時間も経つたお陰かマオ大分いつものマオに戻つていた。いや、たぶん無理をしているのだろうけれど。

少しでも不安が取り除けられればとフェイは思う。

「もう夕方だな」

「あつ仕込み！..」

窓を見ながらフェイが呟いた言葉にマオ過剰に反応した。

立ち上がり駆け出しそうになつたところをフェイが引き留める。

「食堂の事なら大丈夫だ」

「えつ」

「せつあつこでに食堂の亭主に話をしておいたから休んでおけ」「えつでも話つて……」

「お前が具合が悪なつたと伝えた。店のことなら心配ないメイリンもいぬし」

まだ納得いかなそつだがマオは席に戻つた。フェイも向かいのイスに座る。

「帰りはメイリンたちが迎えに来る」

「フェイさん。もう大丈夫だよ。歩けるし自分の部屋へ「ダメだ」「

眉間に皺を寄せながら一刀両断にマオの意見を否定した。

「一人で帰つているときにはまた襲われたりどつする」

「でつでも見た田男だし」

「……ダメだ。いつでも俺が助けに行けるわけ無いんだから」

マオはしゅんつとなつて「くつと頷いた。
フェイは好しと笑つた。

* * * * *

本当は1人で部屋に戻るのは怖かった。
まさか自分を女だと見破る人がフェイ以外なも現れるとは思わなかつたし、

そしてあんなことをされるとも夢には思わなかつた。
今でも思い出すだけで身震いする。
あの感覚、味、苦しさどれも嫌悪感でしかない。

(僕はこれから好きな人……。フェイさんとできるんだろうか)

考えただけで胸の奥がぎゅっとつかまれよう痛い。
甘えたいのに甘えられなかつた今を考えると、
どうしていいのかとマオは泣きそうな顔を必死で隠していた。

* * * * *

どうもマオがおかしいとフェイは気が付いた。

マオが落ちついたように見えたのでベッドに座り壁に背を着けて読みかけの本を読んでいた。
だが時おりマオの肩が震え何かに耐えるようぎゅっと両腕を掴んでいる。

フェイは本を閉じてそつとマオに近づき、目を見張った。

「……マオ」

「あつフェイさん……これには、えつと……『』が入つて」

えへへっと笑うマオには田尻に涙が浮かんでいた。

そして溢れて抑えきれなくなつた涙の線もはつきりとフェイの田にうつる。

「マオ

フェイは思わずマオを強く抱き締め離さなかつた。

「フェイさん苦しいよ」

マオは言いながらも嬉しいそうに笑い。

マオもフェイの背中に手を回し、フェイの胸に顔を埋めるように体を預ける。

「ああ。すまない」

フェイは笑つてマオの頬の涙を拭おうと触れた瞬間。マオがびっくりと大きく震えた。だがマオは顔に出さず微笑みを浮かべているがフェイは見逃さなかつた。
確かに触れた瞬間に大きく動搖していたこと。

「怖いか?」

「……少し」

小さな声で呟いた声が聞こえた。
そして回された腕がきゅっと締まり、

「……でも嫌つてわけじやなくて安心もある。フェイさんのこと大好きだから」

「マオ

「でも怖いんだ」

そつとまたマオの肩が震えてきて涙が頬をぬりこぐ。
フヨイは急かせずマオの言葉を待つた。

「あ、キスなんて初めてで……。なのになんこ

マオの田が陰る。
もつ震えが収まらなく嗚咽も堪えているようだ。

フヨイはそんなマオが居た堪れなくて、

「無理して話そうとするな」

「でも話したいんだ。きこてほしー」

たどたどしい声でお願いするマオにフヨイは頷くしかなく了承した。
少しでも安心できるようにマオの背中を擦りながら。

「あんなに怖いものだとおもわなかつた。

もつと……。

もつと幸せなものがとおもつてた。
もう怖くて、こわくて。

どんなに押しても逃げられなくてぐじぐじ。
助けてほしくて、

なんどもフヨイたちのことをけんで……」

「マオはもう耐えられなくなつた嗚咽がせきをきつたかのよつに溢れ、そこからはもう止めどなく涙が止まらなかつた。

フェイはしつかりマオを抱きしめて大丈夫だからつと何度も何度も囁いた。

「『めんなさい』

ぽつりとそんな声が聞こえた。

「なんでそんなこと言つんだ」

「ほつほく自分自身を守れなくて。ふえいさんにも迷惑かけて」

そういうとまた『めんなさい』と言葉が聞こえる。

フェイはそんなマオを見るのが我慢できなくて額にりゅつと唇を落とす。

次は目尻、頬と軽くリップ音をたて、それは何度も往復して涙を拭つた。

「フェイさん？」

マオは驚いて目を見開いている。

そんなマオも可愛くてついほっぺにまたキスを落としてしまつた。

「俺はマオの笑顔が好きだ」

「えつ」

「本当はジェチに嫉妬したし、俺だってマオとキスだつてしまつた」

「マオは聞いたとたんに顔から火が出るかのように熱くなり動搖した。そんな率直に言われるとは思ってなくていつもこんなにはつきりと言われたのは初めて頭がついていたない。」

「マオを感じたい。大好きだから」

紡つむがれた言葉はマオの心の枷くさりをといてくれた気がした。思わず顔が綻んだ。

「僕も大好き」

えへへっと笑うマオが、可愛くて愛おしくて。

「マオ。ちゃんとしたキスしてもいいか

「うん」

照れて頬ぐらみにフロイは深い口付けをするのでした。

(後書き)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6779t/>

キスの味

2011年6月13日08時00分発行